さきに紹介した飯島学長による第二八回名大祭あいさつとこの指摘をあわせ読むと、この時期の名大祭が、抽象化されたテーマのもとで、よい意味で統制されることもなく、単に「オムニバス」的な傾向を強めていたことが浮き彫りにされるのではないでしょうか。

六、時代を映す名大祭④―一九九〇年代

◆第三一回～第四三回のテーマ

名大祭一覧（4）には、一九九〇年代以降における名大祭のテーマなどを示しました。

この時期は、一九九七（平成九）年の第三八回名大祭を除くと、一九八〇年代のそれとほぼ同様にサブテーマを設けることなく比較的短いメインテーマが続いています。

名大祭一覧（4）

回	開催年（日程）	テーマ	
		メイン	サブ
31	1990年 （6／6―10）	文明の育ての親と生みの親である。	
32	1991年 （6／5―9）	未来への足跡	
33	1992年 （6／10―14）	腐った鯛、原石のダイヤ	
34	1993年 （6／9―13）	卵からかえる瞬間	
35	1994年 （6／8―12）	種まいて、水かけて、	
36	1995年 （6／7―11）	夢見る頃を過ぎて・・・今こそ動き出すとき	
37	1996年 （6／5―9）	カニ	
38	1997年 （6／11―15）	くさった学生。くさった教授。	真の大学改革を目指して
39	1998年 （6／10―14）	崖っぷち	
40	1999年 （6／9―13）	0からの創造	
41	2000年 （6／7―11）	好きです、名大	
42	2001年 （6／6―10）	白地図	
43	2002年 （6／5―9）	飛翔	

（各年『名大祭パンフレット』より作成）

第31回名大祭　仮装行列（『'94名古屋大学卒業記念アルバム』より）

◆「お祭り企画」の増加

この時期の名大祭の動向を象徴的に示していると思われることの一つとして、「お祭り企画」という項目がパンフレットに登場するとともに、その企画数が増加傾向にあることを指摘できます。この項目は、第三一回名大祭パンフレットで新たに設けられて以降、第三六回パンフレットまで連続して設けられています。この「お祭り企画」という用語から、前章で紹介した飯島学長のあいさつ文を連想した読者も少なくないと思います。当然のことながら、右に述べた各パンフレットでは、「お祭り企画」のほかに、「学術企画」「学部祭」「有志企画」などの項目があります。この「お祭り企画」という表記には、一体どのような意味が込められているのでしょうか。

この点に関しては、名大祭関連の学内資料をみると、一九八〇年代後半ごろから名大祭に参加する学生数（とりわけ学部学生）が減少する傾向にあり、まさに一九九〇年代前半ごろは本部実行委員会側が〈学生層を引き戻す、魅力ある名大祭づくり〉を懸命に模索していたことがわかります。「お祭り企画」による魅力の強化ということの是非はともかく、名大生の多くが参加しない名大祭に対する一種の危機意識が読み取れるのではないでしょうか。

◆第三八回名大祭テーマ

ここで、この時期の名大祭では異色な第三八回（一九九七年）のテーマについて、簡単に説明をしておきます。

「くさった学生。くさった教授。」というメインテーマは、その大胆さが議論を巻き起こし、新聞にも取り上げられました。このメインテーマには、当初「二一世紀への挑戦状」というサブテーマがつけられていましたが、最終的には「真の大学改革を目指して」という表現に改められています。

なお、この第三八回のテーマは、翌年のテーマ「崖っぷち」にも影響を与えていることが次の文章からもわかります（『第三九回名大祭パンフレット』テーマアピール）。

「くさった学生 くさった教授」

大学の現状 過激に表現

名大祭のテーマ

学生投票でダントツ

教授側は一時反発

学生たちは、社会の動きに敏感だ。教授陣の大学改革への取組みに対する不満が、学生たちの間で高まっている。大学の現状を大胆なまでに問題提起する名大祭のテーマ「くさった学生 くさった教授」に対する学生投票でダントツの支持を集めたのに対し、教授側は一時、反発の動きもあった。結局、テーマは変えないことが決まった。

毒あるテーマだが センスは一番ある

森正夫・名古屋大副学長

しかし、大学改革の問題は、学生たちの方が一番よく知っている。学生たちは、教授たちが、学生に対する教育を怠っていることに、強い不満を抱いている。学生たちは、教授たちが、学生に対する教育を怠っていることに、強い不満を抱いている。

幅をひろげる機会に

森教・京大名誉教授の話　大学というのは、一種の文化的環境だ。消費機関ではなく、多様な「場」としての役割がある。その場を維持するのは、ごく少数の人たちだけでもよいのだが、いろいろな人間が集まってこそ、大学は生き生きとしてくる。いろいろな人間が集まってこそ、大学は生き生きとしてくる。それが、どんどんなくなっていくのは、学問も教育も、ますます貧しくなってしまう。

「くさった学生、くさった教授」というテーマに教授側が反発するのは、変だと思う。この企画が、もしかしたら、「真の大学を作ってゆくのではないか」、学生や教授の間に、ある意味で、名大が文化的に豊かな場になっていれば幸いである。

テーマの最終候補と投票結果

くさった学生、くさった教授	投票
キャッチフレーズは「21世紀への挑戦」、今「真の大学改革を目指して」に変更	投票
正しいは一体誰か	1票
目を、覚ま	2票
4ヶ月バカンスのスペクタクル	2票
忘れてしまったスペクタクル	2票
Evolution&Revolution	3票
感謝、感動 ～明日への第一歩～	3票
知識体系の再構築！	3票
………	1票
投票総数	31票

（朝日新聞1997年4月29日付）

前回、……(略)……大学における学生教授双方の無気力さに対して一つの警告がなされました。しかし、……(略)……改善に向けての行動を起こした学生は教授はいったいいかばかりいたでしょう。問題意識を失った大学はもはや「崖っぷち」状態にあるといえます。しかし、このあと一歩の「崖っぷち」状態で踏み留まり、この状態を脱しなければなりません。そのために何が重要なのか。今こそ学生教授一人一人自覚し、さらなる飛躍を目指そう。

おわりに―名大祭の未来―

名大祭は、約四〇年前から現在にいたるまで、同じ名古屋大学において同じ名称で繰り返し行なわれてきた行事ではありますが、一つとして同一内容のものはありません。それは、少なくとも名大祭という場が、それぞれの時代の学生にとって自己表現の場として受けとめられていることを示しているといえます。